

2224

古今
奇談
繁野話
三

い

(五) 白氣の方猿掛の岸上と怪骨を射る話

右人云。鬼神と山魅の類と幽現の別あり。山魅本客岡兩猿狐乃
類へ皆形體ありのれ。時めにて形を隠し時めにて形を現し是より
一靈明を使ふ。又巧拙の分あり。巧者にはぬを假使一人の殺を發は
し抜きに靈と假して人假せり。鬼は人没して土中ニ骨のふき。骨
肉は生々属し。其氣は發揚して空より伏鬼の神とす。體さく變
き。是も尚異常あり。たまひの余を降り嚮多人の乞ふ立
て。近うて其跡を。異うるべよ托を語る人附て靈をし。
形體を化ゆ人假せり。身れ然り。靈を示せばちる人のよみ
そ。才すも惡力の。假鬼の虎。又使鬼。狗神の人のあ小令多類有
れ。とする人並み種の有情のれ。皆神ありてあく附き人よ托し。

○英艸序後編卷之三

くるふる鬼の神より。靈なり。假身と先ふる人のゐを後ふ
と見せ者の天情より。世の人多く免とば。故より自身へ其神
の通づる所をひきだす。他人へ知らぬをぞなり。上古山川草木ま
だ開闢どん居り。密ちに山魅の類人より近く。形を近づて人間と
交ふ。人皆山魅の為不を知。後世人民驚息し。山を開き海と
築て其食を足。險と通。水と引て其運轉よた。人移れま。自
ら蹊をつく。地平うちんべんあらまうて。居る。龍蛇虎狼忍れて
人よ遠ざかる。山魅。固兩方も靈かれべるをく深く處て人間み
近はらず。後の人に多く因よんざらうかよ。鬼と魅のみよとちうど混
じて一にして古への性事をばて。今之ざらをこそ疑をなことをあつ
が。よく者へをばて今もあくとして理を説ふもあり。又古のもの
へ今もあり。今かたのもの古ともうとづる。時慶をぞうざる夏

虫の見りり毛れい文からぐやへ天孫と近く間長生もあり求りすしてよく
被か。巢居風とあり穴居風とある。深山大澤何の怪うるゝとぞ。有
東國又は本モ商客。本曾の妻籠と云ふ脚を傷り殺日湯治。
寒暑の是國も長夜に詫よモ地名産物も計ほへてお柄。其里
祖上よりそく住る老人座りあつて云。げ不を妻翁と名づくと。ゑぐ
これありゆ老う先づもひづけよもせぬの傳うそ。田舎人の口銭く
彦うせざるに事性くさしタレモ。誠よよきの妖霊もにきて直説
本のゆみ是々身開の詫よあらど。清和天皇の時。善濃守源朝だ
頼を信濃守と將任せらるゝと。其時信濃守國室桂屋大領が主と
須守廉。権門の吹舉よりて信濃掾となりて國から妻女を催し登
せざるとき家人等を石具して東國の路より赴き。日ね歴て危険と信
濃の界から岐薙の深坂よからぬ。小笠原を彷彿と驚けて陥き路
歩きとば歩ひる。人馬共よ疲勞と。行ひむじうらを済と信濃と
通路不便なりと。文武の附波薙山道を開いた。山石と碎き根と
1.當時何と手に負ひよ路定まがくえ。よう此山中烟瘴深く。妖怪生
没し。往来多め。へどこの程も祥と名と云ふ所あり。後世其跡をうそ
と。其懷よ一の洞あり。隠き林は岩窟と云ふ。左へ轍立てこそと。を方
格定め。かく。數十年の間もくわづれ。洞の中は宮殿をば見るこ
とあり。山下の人ほどの角をそ。お経文を讀んで早く其筋をくりうち。若
なめみてそとくとすれば氣ち空すう大石破けり粉碎と。き。此
洞の怪ねあり。馬の骨へ一片の雲とよみて能行を。なよ今うふと
づて能行と。其半身は猢猻の體あり。神代よりこことぞ神
通廣大變化きる。胡々雲霧をぬじて山海を不休とぞ

を欲しき。物を撮る。偷みかねばざる。時々人をとづらし。宣教
力せども。供物もことと制する。あくび。次酒より。おもむ
く。寝されば。云ど。陰陽採捕の術をひそめ。長生れん。修煉也。近國諸山
の妖怪山精。皆よし。却下よき。人。猛烈を役。耳報れ術をねぐ。
洞の中よ居す。百里四方の動靜。とくちうと。孝子上忍人の如し。
そこに一日西南の方より。け路を重り。一行の旅人あり。其中よつて乃
張興あり。荒雲あ然然。素そよに興の内焼きぬく。容貌深雅
さうすき。額。花のとくとく。あたはり。其支干と相承もよ。既に十六
歳にして丈夫。今年二十。と承よかず。いざや。持まく。酒
宴の興を済すと。即時小山神小令して。往還の路上に。一軒旅館と
化理す。先がよ宿。驛うけねば。かく。ばく。宿夕べ。旅館よき。そ
女を攝て。洞よへむ。一山神承て。結構とほ儀よ。白日を暗夜と見



守廉山路小僕は、ひそひそ日も夜もひそひそあり宿る。従者候
皆ひざれて休息し。旅宿の老翁に、ひそひそとほん客室
に坐てお語り。けあれ今年半餘年耳。いのうは、宿落かりても
は、ねばあとの用ひ立ねども、旅のあふへき幸あそあき。うれしう
向へふかく深く盜賊狼の害多し。具せむる女房のほうへひし前
よ移りまつて。廻向へは、あらて多く人殺をひそ追ひ。此方貧困
すれど、幸へうる山賊のあふれをひそむる。守廉冷笑して、すれど、背
りぬるゝれ奉承をかう。本因とひがきりの折殺と折まうりゆう。
ひたむけよど山賊又用ひそぎ。殊よ天聽の令と蒙て、國の鎮として
我第事あり所れ老黨若黨に一人あふの家の子たりと。勢いそき
詞よ亭主も其席を退ぬ。若黨難人へ端よ附。使女の裳へ服の反よ
附ね。守廉の妻の白扇と正面の間よ宿す。ふ中の移なる處のうち

ばくへ。寝ねぐらして笑ひ興る所ふさとびがごくの眼まゝを
ぞとせど寝なり。まことに風の音ふ同体えし傍ゑれ早く安席と
そぞ清潔とゆきとよだのむろてりやせだづくし家と是
ときわへたくえざとそくひ三本の隈使女家人等も皆まほ
上にまろび伏う。こへあく夜とあくひあこせだ。家のふらもく
じゆそひほひ。然後をとくに一つの民家もかく用意ゆくふてに
を寺れ鐘聲をすばやき初更なり。宿ど着の心地とくらむ
妖怪のたゞめて旅宿と假よ宿て女房と奪ひ紹へ山林などよ
みの所みると忙き遠ども今ふんぞ。樹下よ三病とあがむて其來と
あり。民家ある所よ立りどうて人馬とぞら。家人を東西へおちあつさ
うおはも。何を乞ひしるともよくいふ中そひゆるん聞ふ事
がとおもすけ恩毛のふへ勿論。女房と妖怪よそくす國の二門

○英艸庵後編卷之三

五

何の面目もて再會とぞとお狂へきとみ候まども。云ふ事
あり魚漫へびと。其所を歴して國の府ゆづる。國司よ謁を許
里の様ユ代りて幸よ國の旧き處を残まろに意と身の人とがる。
而勢を固よあらんぞ。どは人よ對面かげて病ありと被處
り給ふる侍と公賤の家の方三人を送。女房の生死と厄運とぞ
やじうぞ。猶もるよりとては房の難所を云かことかたぬま
らつくりしに人そちにきて。ねへ鬼の洞ようとせんれりよとそ
バ胸つづりと瀕瀕て游ぶ。備同よてりびと快遊をすやすべ媚りは
女房裁人よ伏侍て大ねよとそくして赤く鼻尖と。身だけ太
もろいの仁王の顔が。後の衣服よ皮とりと股内をゆがだせて白薑
の傍よむれ近づき。縁あれどあとけあましよほしげ洞のうち別

にての世界にておもに来る城女ハシタと横でも駕かひ、道は身を
かげき伏とて我より車云々長生を樂めとぞ伏とて御やう
ゆかへた。白鳥ハ彼ガ美極モ恐ろしき氣も魂も雲間も飛ぐ
モカレド。同よアヌ鬼のうらむくそろふとモカレド。アリ
アリトモ伏念と眼の振也。ば古伏念すも死を伏さと云
詞ハ惡は一かん。白き耳根と黒き髪のこぼとく泣條一枝
乃化粧の泪と洗りれども惱うる西施泣る虞氏昭君出塞憂
容揚妃馬魄の愁眉もかやとありまほとて天絶の國也。多ニせす
が身を失らさんと女房等もかやせと誇ひたけあり人とな。多ニ事
でありござと伏憂み引んじん。白鳥是を拒みて我實人の事と
して由からず不の快内と入がべつどと勢氣合ひゆふ接て勢
○英艸席後編卷之三

ぬをみ。りかたに生れむさび。くわき風のをゑよ吹き。一水の海
波をあと。徒身（徒身）とけりぬ。又従（従）はざむは者。あくまほく懲（懲）し。
遂（遂）は妖術（妖術）と惑（惑）ふ。ときたるに早く泥（泥）をぬつねといひだし
と。和（和）くふをいはど白糸（白糸）がみでれやゆ。女房（女房）とも詞（詞）をきそ。並
の人心（人心）にはやすと下（下）きこゑ。れ雲今ハ大（大）いこうて。白角（白角）を下（下）ゑ
正（正）洞（洞）の中（中）に用水（用）を送（送）きて汲（汲）くせ。衣服（衣）を洗（洗）へ賤（賤）の役（役）をま
し。白糸（白糸）却（却）てこそとうらきこまよらひ。りふ奈（奈）あつて水を汲
く衣（衣）をわらひ。じいやしき業（業）をかんとも。身と汚（汚）をうはまうねと
せよ里（里）うて。故（故）の土神（土神）を行（行）と再び家（家）をほじわらひとおせぬ。自ら
力（力）あつき。洞（洞）の中（中）に移（移）へ定（定）へゆく。月の夜（夜）は秋月（秋月）のすくも。三月
の後（後）。能（能）を其客（其客）の若（若）らに裏（裏）へて。俗（俗）虧（虧）ひ。おぐら。猿経（猿経）
をゆくて。絶（絶）を表（表）ひ。一日。あ廟（廟）。宴（宴）を設（設）けて。其客（其客）を白

○英艸席後編卷之三

一七

馬（馬）を酌（酌）。而（而）しむ。窮愁（窮愁）の緑樹。此花梁漱（梁漱）吳（吳）の行（行）など。宴（宴）は
ア。其餘の女縁。小草（小草）の行（行）。飲（飲）い無（無）の席（席）。又白糸（白糸）をさうに眼（眼）と
儀（儀）も。人。變化（化）に女（女）を。相御（相御）て。戯（戯）あるを。目の不祥（不祥）ア。便（便）ト（ト）と
俯（俯）よつま。酌（酌）とくづかぶ。ねく。極（極）り。酒（酒）をこな。ももあづ。船
雲（雲）も。あく。罵（罵）。正（正）と。うげ。擇（擇）ん。と。や。が。罪（罪）。又此座（此座）より。座
一。又各二つ。あく。この巣（巣）を。浴（浴）て。本主（本主）と。ちうり。ゆうね。白糸（白糸）は。更（更）も。や
まらせう。と。身れ。濯（濯）を。あう。桶（桶）を。肩（肩）は。て。蹊（蹊）を。わづ。浴（浴）。流（流）。流（流）。
ちや。浦（浦）。躍（躍）。と。そく。ど。じ世（世）か。と。あ。を。ある。今。命（命）を。か。と。年經（年經）。う。も。就（就）。そ。極（極）。か。と。變（變）。今。角（角）。互（互）。と。勝（勝）。今。か。と。年經（年經）。う。も。一。な。く。ん。う。と。見（見）。命（命）を。ほ。ぎ。と。石。か。た。人の。果（果）と。そ。そ。ゆ。と。そ
が。寛（寛）が。との。み。う。き。る。の。宿。り。代。二。の。桶。よ。く。の。代。せ。だ。ゆ。れ。よ。と
休。も。く。や。珍。じ。や。其。こ。の。と。世。れ。中。の。人。と。そ。く。ほ。う。か。ア。く。ま。ざ。じ。と

向の峭たけをつるひ。左からよ鳥とりをさくせで來る人ある。弓矢ゆうしのき直
ひを刀と刀とかびて。様よう人ひとなど近づくと近づくと近づくと近づくと近づくと
こへうへうへうへうへうへ。隼はやぶさもそれもみて女めうづ泣なぐさて詞こと生なだ。守
じと日ひ夜よび旦あの夕ゆ一いつげふ。或あるは別べつてうち家いえとそ源みなを擲なげて。けふて
きの轟轟乃里のさと又またあらねあらねと。隼はやぶさもそれもみて女めうづ泣なぐさて詞こと生なだ。守
日ひ夜よひあらきとまぬの縁えんをざらざらしてがひよ深ふかく泣なぐさて。今
しも河かわの所ところみちるどと同おなむと身みの裏うらとハ飯めし食くのふまは
もつてまくやう。めくらを起おきてそをあき。洞ほらへ見みすうりゆよアやうる
屋やの様ようよしんはり。語ごく代だいて守まも廉れんけゆかかて伏ふして逃のがる
とも。休やすの妖おとこ怪け十じゅう里りとほのびさをあく。返活かへりせんせんても佛ぼつ神じんの力
とゆくぐにいれ。本もとはまやく。人ひと多く催あし。後の十五日じよろこび
そがへん出で会あ。栗くり内うちとそ圓まんよ転入たんにゆふべ。其そのあとは氣きを立たて
察さらとぞ。心こころをうかてばくし。身みを汚けがる方ほう位位あをやく候まり。
今此不ふ時ふううべ變か化かひづれづれと。我われは早はやく立た別べつとんと糸いとを
放はならみて船ふねと情じひて。男おとこも女めのこもよりよりまの上うより度たどくと女
房めのこのよとて。客きぬへ妻めねも孤こて旅たびぬを是これもやんと胡ご服ふく
うう無む様ようきう出で一いつ若わかよ髪かみのそとみとくらひし。ゆう風かぜくことことも
あもすうやうのすだへ。婦育めのくのよれ。あり渕ふちの本もとの糸いとあ寝ねよ寄よ
くねくね付つ。多お多おのあきらめ。爰あらまみまみさんさん。そなば者ものに宴うた会あと
園わいよよて。浅あさははやや變か化かひづれづれて。あり。着きふままとらひひて
それからからて。ひ足ひあしと酒宴しゆえんの興おきと。花はなも十分じゅうぶん醉ゑゆく抜けぬけらきて体からだよ入はる。汝なのこうへ。女房めのこもよめのひ身みを熱ぬるららしだ。ち云いふ我われ妻め
計そくと落おちささくも多おくう類たぐたぐに淫いん的てきと立たて眠ねる。主おの如ご

よ遠て次へ出まし。從便桶をとひ酒宴の席へ出まつる所くも怪
あらざる。言ふ禁制せり。傳うてくるべからず。まがま
とえてもうしげ小桶をもそよろとひ。餐を奉るを別處に膳を
一圓玉筈をゆす。それ候て更とあげしかり。され等は彼人のあざれを争ひ
争戯とかり。此れを断るゝもみ生を。る鳥の音。霜雪。其時をさひして十年ともあべて。故にさうそくみやう文母を
いとらふ心念のうゑ難かれてぬべき今うそくふ々誓ひしも
そよと願ふるに。世人のあもんそよんは故にに送りにし。美やみや故
す。まよくてつむ願ひしが。或來諸寢の差破とぞれをうるわ
ば洞の四海へとぞとぞり乍り。どん人の力よとめぐらしく。又是れ
が映る。よの家より晴ヶ林の道へとお興を路す。横ぎて被る
じめへひこ君の家よりとぞひてよき。よき。よき。



遙々其計術よ後ざるゆかと詔を下すて向ふ余り方城は
言ふ事なし。夜雲も霞拂つゝと山氣をそよぐ。言ふ事なし
て云ひざれども。女の心よりさぬひがめの意よもとづく水の形にて
こそ取次りがま。おこぼらばやうじのへかくふりでゆくに。
又千鈞の響の一重乃縫を穿ひての理うべ

白菜の下

都說守廉へ妻女を失ひてより。故廻の名号まできる。險石
をこぐ。危彈信濃の山中をそよぐ。三日六日足とどらう。弓
をかざうと猿うけ。春はせとゞ本どんをいたに様よ教くねえを
端う。谷水のほきに夏をとかよせむ。參らの家と凌ぎそ
空し。つよはほのあむる宿をかく取つれば。本曾の伏魔の竹ぐ
ら撓り雪よ踏と室だれ。え立つてふの家燃んととふふせん

おひらくとよば近國のふゆきに従候候變化の不むきびれ
を。また女が今どりでしくいねねでわらべき。先近きよろ遠く及
びんと信濃一國の幽谷を搜る。えより強家の家の子あこへんとを
放小て。鉤をほみ若年附し。松をあて把火とし。巖の下。すう根
林。般原と極り。名作の棲處。ふ紙乃テがとまだ教るくて細足を
とじも。絶の猿猪の窩のかへ妖怪乃位べき不もアヘど。まようぢ?
賊の男にわ語を仕合て搜尋回る。深きふ中かねぞれをあ
きぬ。もあやしき所もあつうん通入べき路のかへ。すれもといま
又とけぬ所のとなりとひが中もみかうる部は。麻きぬの袖さく
まをふして。本密とて魂消ふわくとあんから。核本核ふふく精
入。目一つかてうごめぬ。力はく細魚。たよ隠。ざれどあと害
いだ。時氣よろそむ。時氣よろそく。城と是とアモアハたれ
る。

○英艸席後編卷之三

十一

アベキズ木きる。叔父うかのうりー。者う此ふよかうみの洞の今
のあうて。春の比晴天よなよいあくねる。を理ト。其傍は株あらん。石
掩せ。洞完備。あつり筑る。ありてあ候。も。傳く。しぬよかうみ立
ころそづらとも甚ふ。心室が。ア。お前をアレバ恐一きて。ある。す。
かせぐりの。一。生の。内とく。ある。おやかと。会どろ。と。あり。ア。とも百
年よ一度。へ。現り。と。ひ侍。と。る。四五十。年。あひ。おのれが。おも。人
て。よう。へ。其洞。を。見る。の。か。し。ほ人の。住。て。や。侍。仰。へ。ふ。も。あれ。え
よ。う。奥。へ。左。と。霧。ふ。く。と。左。か。く。お西。あ。水。を。別。か。く。想。ま。山。豐。も。入
る。底。か。ど。と。済。る。守。廉。丈。よ。に。け。ても。公。れ。く。と。ど。よ。や。ち。な。え。も
絶。ま。ぬ。あ。ん。や。と。把。火。光。と。照。す。や。霧。う。早。を。勉。強。と。ひ。入。つ。ア。ね。を
方。格。あ。し。ど。が。ら。う。を。里。あ。う。と。た。め。ぐ。う。も。の。と。わ。い。し。ば。す。や。ぐ。き。せ。ぶ。れ
も。す。一。月。絶。望。と。行。か。る。き。う。と。う。の。怪。一。き。ね。く。そ。そ。く。て。る。

大巖の上に坐するが長のセハスもあらず。急あく様にゆき入る
ごとく、人を見えぬ其姿のど、音の章人よ仰ろ。坐す所以上
唇額くちこめまほく人そそせ坐れどもくは淡者うすじやうどもくは組くみをなす。
守廉制しりんせいて。あれこそ坐候おき御みとくは歎なきなり。孫千年かしてきくも
づ。いわの西あうとくろづかへばねを捕獲つかまつひれども。其力万
鈞を舉るとすばかとぞ勝まさす。我心こころうち法ほうより候候まつまつを
て。ひそく小矢こやを矢やひ。遠とほ断だんが多おおくと竊くわぐらてアド射さる。巧わざく上唇じょうしんを
額くらへ拭ぬぐて射さく。一發いつぱつさけびて山巖さんがんのうとうこうじかち矢や
負うけひだりうづげゆくと。のぐすなく体からとまく。いはじ。身みひくろく
うる苔陰こけいんよ岩窟いわくつひくと血け筋すじひく。がふ把火ぱか提たすみえりとくは歎なき
御ごきて動うごすたゞ頻ひんと號なまめて哀かな。主屋おもやほとのう。やごと丈石じゆせき相あわ
て頭かぶをすひすげべ。一發いつぱつさけびて其そのとくはゆうのどくをるの本もと

○英艸席後編卷之三

一一二

なげやうてまくろ。巣の内うちをえりくとく。巣のそゝぎる上うへふをか
一腰いわき。汚汚よごてねけど希有きうのものなり。あるもさざくよれど。鹿兎かとう
のいさくよし放はなしてまくろ。まくろのとが。たつは難むずかとぞ
あらば生深いきふかすか太おおはづれ。りくはきぬ此この巣くずと宿すくとまくろ。牢
を頭かぶを搖ゆて。案あんそろて狹ひへひど。牢らう放はなす歎なきなり。今般いわん
をそそれ。ばぬなり。今も雄おがゆきあらばじつれ。娘むすめふせば難むずか
あらば。先まを失なて皆みな怕おのき。まくろ。我身わたしよもひとくづ
きあらば。益ますからぬ殺生さつじやうと。娘むすめよもひとくづ
て。ぞと経たべき経とくのつ。翁おきなそれば里さとかて人家じやう休息くきは。兔う
角つのに霧立きりだのがり興おきへ。人ひとかとよもぐきと。さすがの太丈おおじやう
夫めもふ屈くしてん地じ例たとひ。かくば。かくば。もとりかく。ぞくに浦うら鳥とり
宿しゆくをの本もとよ。下くだかへま庵あんを結むす。後あとへ真ま後ご集しゆ普ふてりそ

而いはり。三依道人とひどき翁とある。持行する孔雀明王の法は白る
佛教と漢土よ雑ざらばあよ。玄仙人西盛よおびて是と傳て。今
聖に傳流し。病体折と禍を拂ひ。拔苦与樂の疾をあゆぬ。而面相
先し。是か。口を説く。示して遠の信を擲て。禳薦をす。又
玄文の詔。トハ件を説く。示して遠の信を擲て。禳薦をす。又
日月に縛る。此一七日は三種の密法を脩せ。とくとくと本端の人君某と
守廉遠例道遙のあひ寺に來る。道人日中の煙を下りと約みて
引をす。某へそろう西國のみなるが。西國にて妻女と妖怪よ取られ
せ死の格を究めんふ。樓も三年を経て。再命の期ある。而若者
を下へまつて。華と華と。道人守廉を近づけ面相。一沈吟し
て云。まだ時乎。命を全くして。且尊國乃生主。年數つゝ。守
廉云。我と汝と右儀の産。失う所二十ニ罪。今年才入界を。不
じら。又卦を差く。數の言よ云。其占を承くせば。深ざれを知るべく。故
人みよ卦を差く。數の言よ云。其占を承くせば。深ざれを知るべく。
○英艸翁後編卷之三

あらん。ちうれも我身未万ままでおちれば道人の卦よりくるる
し。しんせん人男を着ぬくと歎の迷ひ多し。思ふくに徳を換む
不あふ。又石はくひのぬ人を相せび。人面相て今ねりそくと再
び其支干を仰。問えあらと答ふ。道人卦を没せと云。口に懐て皆
と差し。承く廻祥を先。火の本ある姿ふと代改めば。中し美
み人の牌となりて其家へ縁。大志近傍より金鏡巻絹と
いせそ。道人を頗りて一まい。我後ふ卦のとくあらゆ是とども。
近に一つのほせざるをれあり。今日弘誓の法會と號て此れを行ふ
と夜ふから。若人云々。諸時の壇に登き。但よ法會小集
て行ひ。と薬菓を供して傍らる。院上壇より讀經の宣卷され
き。香をひわうて。南極十方の諸天。此一柱の香。以海安神又毅豐
登。この教昭明。又聖れ君歎えられ。又一柱施て。十方施主後佛無
難。行りあら。衆儀を括て其ねの旗を拂ひ。其人の儀

六十三のすと云。

はみ庭より日詣てあそく。紅の衣と襲衣とせし
女房の拈る九十四儀と云。

あるたゞくりのみのり。あへふと。の命有く。とせけ
て人壇を下て。奉教と詔して。あは。貴人頂戴して。恆じ釵をはずす
向う。若人徒弟。又命と玄闕。送じし。守護。い歴。の武家系
諸とそて。而び。被が拂を待て。道人。拂ひ。きて。あは。問は。聞て立
か。紙今も。ふ寝。たぶの後。小泥。ひき。板人。と。あく。失ふ。我女房
わら。大驚き。變に。をあて。じ。名の仕業。ひう。誰も。あれ。眼あ
の。然敵脱すと。あは。大ノ。絶。ひと立ち。急て。手縄の一。ふ。と。第

勝りがく。多やくものひやじよつねてるにと。大やまとくくなつたのよ
つて振りそひ續てあるはるのゆかほひ。間もなく東のこの矢とりみ
ぐくて嗜らび。ところちきりに射う矢を悉く拂のけつゝ身をあく
ぞ。す處着忙抜詰て切てると。大名まろとそむく眼のいろ。一身ニ鉄
懶く是(ビ)居まつて朝きたる。白柔(ハリ)りどうとひそんだ。是
しヌ休色(シズヒツク)と言ふりてゐらひの外。念ぬの相(シナヘ)て
係女房(シナヘ)会ふ
く還(シタマツル)職(シヅク)就(シツク)るが事(シテ)体(シバ)下(シバ)失(シタマツル)後(シタマツル)放(シタマツル)るを(シタマツル)。なまくへせ
クと西(シハ)アラタ(シハ)カヒ(シハ)を(シハ)敷(シハ)く官麻(シハ)。徳(シハ)吉(シハ)又(シハ)そ(シハ)わからず
トリ(シハ)れ(シハ)お(シハ)う(シハ)と(シハ)ひ(シハ)く(シハ)の(シハ)衣(シハ)人(シハ)中(シハ)と(シハ)あ(シハ)そ(シハ)是(シハ)る。シハ甚(シハ)ま
シハ下(シハ)と(シハ)逃(シハ)てゆ(シハ)字(シハ)處(シハ)が(シハ)面(シハ)と(シハ)招(シハ)め(シハ)り(シハ)小(シハ)家(シハ)の(シハ)ゆ(シハ)大(シハ)石(シハ)室(シハ)
と(シハ)落(シハ)る地(シハ)だ(シハ)ま(シハ)肝(シハ)は(シハ)づ(シハ)て(シハ)處(シハ)の(シハ)ふ(シハ)て(シハ)う。紀(シハ)うち(シハ)兩(シハ)軍(シハ)く(シハ)れ(シハ)て
「どば人の(シハ)因(シハ)る(シハ)宿(シハ)の(シハ)透(シハ)さ(シハ)れ(シハ)と(シハ)そ(シハ)う。字(シハ)處(シハ)

○英艸帝後編卷之三

一十五

英(シハ)帝(シハ)内(シハ)に(シハ)一宿(シハ)て(シハ)氣(シハ)を(シハ)養(シハ)ひ(シハ)は(シハ)慢(シハ)お(シハ)の(シハ)業(シハ)と(シハ)考(シハ)。因(シハ)え(シハ)か(シハ)う。女(シハ)處(シハ)
あ(シハ)が(シハ)そ(シハ)る(シハ)旅(シハ)金(シハ)よ(シハ)そ(シハ)ど。足(シハ)も(シハ)真(シハ)の(シハ)白(シハ)扇(シハ)を(シハ)ね(シハ)ま(シハ)が(シハ)て(シハ)と
人(シハ)ふ(シハ)も(シハ)か(シハ)う(シハ)て(シハ)心(シハ)熱(シハ)い(シハ)す(シハ)。ほ(シハ)り(シハ)か(シハ)う(シハ)。が(シハ)く(シハ)て(シハ)白(シハ)扇(シハ)を(シハ)ね(シハ)ま(シハ)達(シハ)
言(シハ)ふ(シハ)か(シハ)く(シハ)別(シハ)と(シハ)。な(シハ)ど(シハ)が(シハ)そ(シハ)よ(シハ)此(シハ)裏(シハ)に(シハ)へ(シハ)る(シハ)種(シハ)あ(シハ)つ(シハ)る(シハ)知識(シハ)の(シハ)ほ(シハ)よ
惡(シハ)の(シハ)相(シハ)が(シハ)く(シハ)ん(シハ)が(シハ)く(シハ)み(シハ)と(シハ)あ(シハ)狂(シハ)神(シハ)の(シハ)化(シハ)現(シハ)す(シハ)と(シハ)あ(シハ)わ(シハ)。字(シハ)ど(シハ)
力(シハ)量(シハ)ら(シハ)矢(シハ)も(シハ)近(シハ)よ(シハ)て(シハ)あ(シハ)り(シハ)。裁(シハ)女(シハ)の(シハ)身(シハ)と(シハ)計(シハ)按(シハ)の(シハ)ウ(シハ)く(シハ)き(シハ)や
る(シハ)。彼(シハ)ま(シハ)は(シハ)彼(シハ)は(シハ)う(シハ)と(シハ)お(シハ)う(シハ)と(シハ)。は(シハ)は(シハ)う(シハ)と(シハ)。は(シハ)は(シハ)う(シハ)と(シハ)
ち(シハ)い(シハ)て(シハ)是(シハ)の(シハ)不(シハ)足(シハ)と(シハ)化(シハ)げ(シハ)。施(シハ)寒(シハ)と(シハ)御(シハ)を(シハ)う(シハ)ふ(シハ)。身(シハ)小(シハ)近(シハ)
寄(シハ)眉(シハ)を(シハ)う(シハ)ば(シハ)残(シハ)と(シハ)も(シハ)ほ(シハ)か(シハ)。さ(シハ)ま(シハ)だ(シハ)と(シハ)て(シハ)你(シハ)が(シハ)貞(シハ)を(シハ)決(シハ)
拿(シハ)へ(シハ)き(シハ)や(シハ)あ(シハ)す(シハ)と(シハ)ア(シハ)リ(シハ)。白(シハ)京(シハ)御(シハ)ゆ(シハ)ゆ(シハ)て(シハ)う(シハ)女(シハ)も(シハ)に(シハ)意(シハ)
じ(シハ)て(シハ)一(シハ)狼(シハ)の(シハ)も(シハ)ほ(シハ)か(シハ)。我(シハ)通(シハ)か(シハ)よ(シハ)怒(シハ)き(シハ)そ(シハ)女(シハ)が(シハ)和(シハ)き(シハ)

遠かれて身を離さうがなんと悟りのようだ。社も女どうと匂ひて或
出でと流して。或の神世うじあふ様て已ニム。者一太ふ祇の神
説をもれて天孫小役ひば邪守復の神乃般もへるづうと。其の
不穏をつづらそ詠返し。然ふすがからとまつすが我退はゆく
不よ霧をかして人間よえせり。承くにうりて其の事かあづ
ねは。我を厚きとよもよて勤役のてゐ。皇孫に附して及ぶ
りしれど其餘の事へ答へあづくば。むつより多きの女を擇てまつ
たはひとど。七人の園松み石れ栗へ天蒼氏の賜人方の產す
嫁女は車もえ車もよろよろと毛着のみねとそく洞窟
もんづる。ゆゑて遙りとくきも多くへ令社となり。者うる山
内山下れ里にて社と名だけて少女を供す。はれ我達もあまも
多くは是村安ひしにゆきと故せざるう向路と其事えらう。右



我もちよ形をいたして、とてぬ男となるべからず。にふりきくものもい
う一ぐま。我徳をひざれて承じうる。それへは下よ卑きまぢうれ
る。里へ出てあづけたまづは密使をくどき。是とくねめがく。
寧むかす國の人なかへと。公私をそそぎ多くの女房殺しておもむろ
ちんう。此と幸い。宿せし病や。宿さど。明とぞ道人よつてぬひいと。道人翁
教と大ゆづり。今日妻姫の相をうなぐまのと。不ふ愛じて眉ひ
けをほぶべ。安どえ。昨日今日のうんぞ相のまぢかるひ。かく
かく。道人をすねみえ。其のとさとくばと。再び薔薇を抜き卦を
置て。氷を捨て。彼も風よ翼らる。是春風冰を解の。是
ト夫婦院聚のたまひ。怪しうべしくと。眼を閉て作と。即ま水
がひかて眼を開た。安どふようといつ。おち前ねあり。は懶め
平甲子かれ。丁酉をねて滅とべき機ある。休が妻の丁酉ハ穴のア

甲子ハ金の運ナリ。燐火をそぞ食ふ者と一生の厄となり大難の禍あ
り。其完業を消却せんとする所也。人貪妄みてたゞもくほ
どがのれは害あるものとほくねりて完業なる不祥通じみび。其毫
のほよれて女を流へるらむ。法會にまじうる。夏化の惡行貫盈と
云ふ。此縁をうげざれべつまでも。時もくば。今卦の吉トシテ伏
て。之れで今や前縁を除くことあり。日本ノ歎きの法の底強あり。不
可思議の妙をうげば。まぬ再會の後是を以てか。狹くまよて
えんば。再び打た下ののみけ力を施さん。字ど云ふ。其念のりぐき
我太岁的少くして彼を除すとあくび。ふ言ひや女と。ひま月
夜をうりうるはれきの女の姿をきく。近道人をと既既て即ち
壇小をり。餐を挿下寶劍を把て。中咒詞を念じ。檄を。香煙内み
焼大喝一聲を。忽然とて殿中昏黒一陣の怪風起る。守半と壇邊
○英艸席後編卷之三

化を擊る。故て、之於里をきて、もろひに宿していな
きうどく守じたま候び。女ぐれ白糸もふ。家人をもろそく里に連
れて。其身はとゆくの後、なりとさうりしの半段は廣き岩窟
あり。其内よ石をたゞ木を横して、鉢の結構あり。而て窟のあふ破れ
と先て、変にうそぞうして、其長一丈の角の異形の鉢。雷火半楚
て、禪のよふたざう。而ち首が切てありて、る細よふはよびぬと
いはゆて、廻廊のやく家だら一画を障よりて、圓代よりいづれ
の鉢局也。所なり。正處れ窓の下に張を替える紙一張ある。鉢をそれ
を陽の秋なり。箱をねきそつと、今時の小袖に鉢をさす。鉢をさすつと
や碎くが山窟とほくと、ゆく柳葉と不よい怪地と、頭顱もある。そ
とが絹布財嚢をまわると、その紙をさす。洞の口に火を放ちて、焚つて
と立候。而司みあつて、始終を語る虚病で、分説をうん圓引る

○英艸巻後編卷之二

十九

希代の事よろひて、人よ詫びとる。白糸もふと、う病と附へま
く極く、ひづるに依道人の靈符をあらて、平愈せり。また寝室の床よ
うそ道人よ謝へ。布百疋と進む。道人今や世財を貰て用ナリと。は一
匹を留めて服用。尚示して、いつて世人陰陽の理ようと、落てお
弦て、居ひ。寛家相得さんと、其前開けたまつて、遂にそつて、寝ておまう
し。是天地の消息である。其内よがーの座連強弱幸不幸有尊位の貞
坐す。かく、洞よへて、後日月よ死の一宇をゆうて、ふらりと。是即假船と魅
せし御方からまぬ、聽て、御假船とて、退く。是うち本尊山中霧のさま
まづく、夜きよあくと。其ま様人賤の男女三四どとて、おまへ。女を夫ひ
あり。本方のはねあれより妻翁の名ゆるよ。馬鹿と云ふ不ハ其前流者と
宿セラモ。兔角のあひて、月日とて、早くも船の住處で、傍中の寺壁み
ぬま。角のゆくと月日とて、早くも船の住處で、傍中の寺壁み

後でかく、婢^{めい}の姿^{すがた}はうりして、物の心よりて懲^{うる}ります。又眞理
に恵^{めぐら}す所^{ところ}ある。終身の痕^{あざ}はぬかるのくまつことさうづたのこゑや。す
や。僕^{わたくし}の首を絞^{くび}る後^{あと}は死^しす。自^{まことに}らとどうぞ聞^きて。射^{いた}てく年
ねどりば恨^{うらみ}をうなが^{さげ}どる。且^{よし}て後^{あら}世^{よの}猿^{さる}樹^{じゆ}の岸^{きし}ともよし。かく云
て西國^{にしこく}のこひし。それともおひそかすと語りでうとうとかく

古今奇談^{きだん}卷^{まき}三^{さん}第^{だい}一^い 終